

日本伝統刺繍とともに

錦織 フミ



日本伝統刺繍の特色は

着物や帯に染めと併用されています。

着物の場合は模様のあるあしらいに、帯は絵師による下絵を基に、布目を読みながら針を上下に刺していきます。非常に繊細な仕事です。

刺繍を始めて何年になりますか。

16歳から始めましたが、戦時中は「平和産業」とみなされ、「贅沢は敵」ということで仕事を一時中断いたしましたので、通算50年程度になります。

75歳になったのをきっかけに、現在は余生を楽しむことに専念しております。

今、カラオケに夢中です。気持ちはいつも若くいたいですね

刺繍に取り組むきっかけは、いつ、どのようなことからですか。

高等小学校を卒業後横浜市瀬谷区の実家におりましたが、当時、女性は学校を卒業すると瀬谷にあった製糸工場で働くことが多かったのですが、16歳の私は製糸工場で働くことには気が進みませんでした。そこで思いついたのが、当時東京で日本伝統刺繍を生業にしていた叔父のことでした。東京に行けることと、刺繍の技術を習えば工場に行かなくても済むという思いで、叔父のもとに住み込み、3年間わき目も振らず、みっちり修行いたしました。

たとえば、帯に刺繍をほどこす場合、どのような糸を使い、どのような布に刺すのでしょうか。

布は京都から取り寄せた箔や塩瀬等の帯地に刺します。糸は日本の伝統的な技術で染め上げた金糸銀糸、かま糸（絹糸）を使用しますが、色はいわゆる古代紫、青磁、ウコン、浅黄色、鶉色、茜、お納戸色などのように日本古来の美しい名前の伝統的な色を用いて、締める人の年齢にふさわしい色を探っています。

刺繍をする時どのようなところに気を遣いますか。

なんと申しましても針目が一番気を遣うところです。手抜きをいたしますと日本伝統刺繍本来の光沢が出ません。また、刺

繍の絵柄全体に立体感を持たせるため、ボリュームを持たせる部分は絹糸で刺繍する前に、木綿糸で逆方向に荒く刺繍して芯になるようにしておきます。このことを肉糸と申します。

針目と芯になる肉糸で浮くように立体感を出します。

たとえば、ふくよかな花びらの風情を表すときなどこの肉糸が威力を発揮します。これは日本伝統刺繍の「命」ともいえるべきところです。

直線を刺すときは心を集中して一気に、波などを表す場合のまつり縫いも気を遣うところです。金糸を使うときなどは、みるからにキンキラキンにならないように「にじみ」という手法を用いて写実的にします。



「自作の日本伝統ししゅう」

今まで、製作した自作の帯や着物をどのような方がお召しになりましたか。

皇室では大分前、当時皇太子妃でいらした美智子さまにクリーム色の地に大きな薔薇の刺繍をほどこした裾模様の着物をお召しいただきました。また、津軽華子様とお母様の留袖にも刺繍させて頂いております。女優さんでは若尾文子さんの着物、角界では、横綱大鵬や貴闘力、琴の若関の結婚に際して、花嫁さんの大振袖など三人がかりで製作しました。ひとつひとつに思い出があり、とても光栄に思っております。

このような、日本の伝統的な刺繍の後継者はいらっしゃいますか。

私の三人の娘のうち次女が刺繍の道に入り、現在修行中です。

糸の結び方一つでも、こま結びや絶対にほどこけない結び方、また「かま糸」の細い、太いの、より方など基礎的なことは山ほどあります。まずはそれらをみっちり身につける必要があると感じています。

日本伝統刺繍の技術を修得されてよかったと思われることは。

子育てが一段落して、再び取り組みはじめた四十代半ば以降はとにかく楽しかったです。一日中糸を持ち、それこそ「寝食を忘れる」ほど打ち込みました。こどもが病気になり「どうしよう、どうしよう」とうろたえたときも、気がつけば糸を繰りながらおろおろしておりました。自分で選んだ道ですが、刺繍という仕事は私にとって天職なのかもしれません。また、はなはだ現実的で恐縮ですが、猛烈にお仕事をしていた時代は着物の需要の多い時でした。お蔭様で、娘達にはそれぞれ好きな教育を受けさせることができました。

現在、着物を着る女性が減っている現状をどのように感じますか。

とても残念に思います。着物は日本の気候風土が生み出した独特の民族衣装であり、日本女性の美しさを引き出してもらえ

る衣装だと思っています。特に着物を着たときの襟足の美しさや、真っ白な半襟、刺繍をほどこした華やかな半襟を付けたお嬢さんの襟元など、初々しく魅力を感じます。

また、着物もただ着ればよいというものではなく、美しい着付けや立ち居振る舞いに気をつけることは、着物や帯の美しさを際立たせる要素としてとても大切なことだと思います。

(インタビュー 文化行政推進室)